

NPO法人



2015年 3月10日
第25号

Jomon Shiba



特定非営利活動法人
縄文柴犬研究センター

もくじ

縄文柴犬について ☆JSRC副理事長 五味靖嘉	2
縄文人の狩猟-1 ☆東京国立博物館客員研究員 金子浩昌	4
私のオオカミ進化論 その2 ☆生命の星・地球博物館名誉館員 中村一恵	6
シバの散歩道 (25) ☆JSRC理事 根深 誠(文筆家・釣り師・元登山家)	10
お便りコーナー	
☆岐阜県 中尾洋一	14
☆東京都 中山康子 ☆秋田県 藤原庸子	15
☆北海道 橘 喜代子	16
☆秋田県 小松愛実 ☆京都府 梅野修身	17
ジャッキーの生育報告② ☆神奈川県 佐藤キヌ・律	18
コロちゃんの思い出と、最近の太郎 ☆和歌山県 土山仁美	18
寒い冬の夕オの日課 ☆愛知県 西谷智子	19
キュー逃げる・雪中のキュー ☆石川県 黒梅 明(2題)	20
人と犬との関わりに就いて(1) ☆大分県 石井 勲	22
事務所報告 ☆新入会 ☆会費 ☆寄付金 ☆仔犬登録 ☆MLに参加しませんか	23
☆諸料金 ☆血統登録について	17
総会・理事会・懇親会のご案内 ☆JSRC理事長 新美治一	24



会員の方には、4月18(土)~19(日)総会・理事会・懇親会の出欠ハガキを同封しましたので、3月25日までに必ず投函してください。会場は、昨年と同じ岩手県「つどいの森」にて開催します。(略図は24頁参照)
26号発行予定:2015.6.10頃です。原稿の締め切りは、2015.4.20日です。

・会費や寄附などをお寄せいただいた方の氏名・県名を掲載させていただきますが、匿名を希望される場合は、お知らせください。

特定非営利活動法人 縄文柴犬研究センター

会事務所

郵便振替口座 02280-2-106951

〒 014-0073 秋田県大仙市内小友字堂ノ前119番地5

TEL 0187-68-2976

<http://www.jomon-shiba.com/>

encounter_shiba@jomon-shiba.sakura.ne.jp

縄文柴犬について

JSRC 副理事長 五味靖嘉

私の幼年期のことになるが、終戦による中国・吉林省(旧満州)からの引き上げ体験が記憶にあります。トラウマのように戦争の記憶残存があり、出来るだけ語る事を避けて生きて来ました。しかし、最近では秘密保護法を初め、集団的自衛権容認など、平和を堅持した世界に誇る現行憲法改正など、私の体験からすると魑魅魍魎の世界が再現したかのようです。

輝くような平和的憲法9条を変更し、自衛隊が海外で武器を使用して、戦争に加担する国づくりの方向へと進んでいるのです。過去70年間、平和を守り争いを避けた人々の願いを斥けて、こうした対立的な考えを台頭させ、賛否で「人々」を分断するという、私の経験上からすると、恐ろしく過激な事態となりつつあります。

これを冒頭に述べた理由は、この考えと動物愛護の精神とは対立しているからです。ご存じでしょうが、我が国の動物愛護法の目的には・・・「(目的) 第一条

この法律は、動物の虐待及び遺棄の防止、動物の適正な取扱いその他動物の健康及び安全の保持等の動物の愛護に関する事項を定めて国民の間に動物を愛護する気風を招来し、生命尊重、友愛及び平和の情操の涵養に資するとともに、動物の管理に関する事項を定めて動物による人の生命、身体及び財産に対する侵害並びに生活環境の保全上の支障を防止し、もつて人と動物の共生する社会の実現を図ることを目的とする。」(書体変更は筆者)と掲げられています。モノ言わぬ動物を、心から思いやりという、尊い命の問題と平和は一对であると掲げられています。

会誌20号「北上山地の獣害問題と縄文柴犬」では、人と野生動物との社会的な協働を述べたのですが、提示したその根底は、賛否を分断するような、「独裁」と

か「対立」という考えとは、無縁だからです。言葉を変えるなら「平和と命」そのものを前提にしているからです。例えば、野生動物と人の暮らしとの軋轢やトラブルを、「如何にして避けるか」という問題は、環境や生態系などが、縄文柴犬(在来犬)との協働によって、解決できるのではないだろうかと考え研究しています。誌面の関係上、以下省略しますが、これは自然環境というテーマと、動物たちへの思いやりとか、弱い立場を愛しむ人の心とも深く結びついているからです。

小原秀雄(2001.5)は「イヌの新しい進化を想定する」の中で、イヌと人は1万年以上の「愛」という[特殊な共生関係であり、相互進化とよばれる法則性に基いた歴史的变化が起こっているはずである。]と述べています。この論文には、人が文明・文化を発達させたが、同時にイヌもそれに適応し発達させた世界がある、という新しい発想のテーマが述べられています。

私は命を尊び、弱い立場を愛しむとか、縄文時代から今日まで、人との関係でイヌは多様に適応し進化しているという、小原先生の想定する、壮大なテーマがここにあると考えています。

そうした中で、JSRCとしての「定款」に示した活動の一端を述べるなら、それぞれの地域での、縄文柴犬との協働による、社会性が重要になると考えています。それは、これまでも随所で述べたように、縄文柴犬としての基本的な考え方は、「縄文時代のイヌとの相似性・原種性・適応性」がある、ということです。

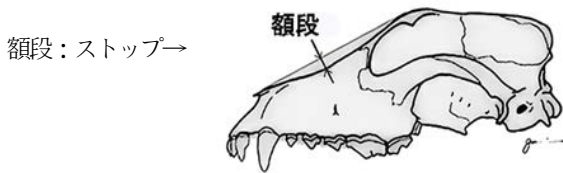
縄文柴犬は額が広く平らで、額段が浅く(長谷部1925)面長であり、鋭く輝いた眼、良く締まった口吻など、バランスの良い品位のある顔貌には、野生的な風貌があります。



①数頭の成犬(先輩犬)は、中央の幼犬を、優しく平和な家族のように連携し、ヘルパーのような役割をする。

②里山でヤマドリを追い出し、その行方を注視する縄文柴犬。

長谷部言人(1945)先生によるイヌの分類では、最大頭蓋長を基準に、小:155mm以下、中小:156~170mm、中:171~185mm、中大:186~200mm、大:201mm以上と、五段階です。この分類に従えば、茂原信生(1984)先生は、縄文時代のイヌは、オスが160mm前後、メスが150mm前後とし、長谷部の分類による小から中小に含まれます。ここで、大事なのは長谷部の分類には、性差の区別がないので考慮しなければならない事です。また、縄文柴犬の頭蓋計測(五味2013)では、オス・メス140~180mmと、やや大きくなりますが、やはり小から中の範疇にあります。



額段: ストップ→

縄文柴犬とその顔貌↓



野生犬: ディンゴーとその顔貌↓



原種性というのは、人工的にあまり改良されなかった(内田亨1948)、と言うような意味であり、やや激しい気性でありながら、鋭い警戒心がある。しかし、一旦信頼を深めた場合(飼い主・人)には大変に素直で従順で、忠誠心のような性質(心服)が強まり、頑固な反面、忍耐強く陽気で純情、様々な環境・条件に適応する能力(研究協議・1987)があります。

野性的とは、野生動物風と考えても良いが、顔貌などの基本的な事柄は前述の通り[額が広く平らで、額段が浅く]です。体躯構成は全体的に力強く締まり、無駄がなく弾力性があり、機敏で敏捷にして勇猛な状態を指し野生動物風と考えられます。即ち、野生動物と対峙する感覚と、いかなる状況にも対応出来る、俊敏な身のこなし方を意味するのです。この俊敏な動作

第3指と第4指の基部が融合した①縄文柴犬と②ニホンオオカミ(1990神奈川自然誌資料)より



に関連して、私の調査では縄文柴犬の蹠(あしのうら)の、第3指と第4指の基部が融合しています。この事象は、単なる早く走るというだけでなく、我が国の急峻な山岳地帯を軽快に音も無く走りまわっていたであろうニホンオオカミとも共通しているのでしょう。

(五味2012.3)

その地域にとって、縄文柴犬は、必要な環境や条件に通暁した、能力開花が前提になります。条件に通暁した能力開花とは、その地域において世代交代し、野生動物と棲み分けた縄文柴犬の、人との協働の存在が重要であり、その条件によって環境(獣害や地形など)に熟知する事になる、と、これまでの実験や体験上から言えるからです。この点が、縄文時代から今日までの歴史の流れの中で、日本民族と共に暮らし養われ進化したであろう、縄文柴犬の平和で従順、愛おしさなどの特色が、一つの展開になると考えられます。

私は縄文柴犬の特性を理解され受け入れられるような、各地域などでの話しあいを様々に企画して、粘り強く長期的な取り組みが求められると思います。そのための重要な第一歩は、縄文柴犬の繁殖・育成であり、平行しながら、それぞれの条件に見合った性質などを、認定する取り組みも必要です。性質の認定には、所謂、教条的規格化や観念的優劣とは全く次元の異なる、前述のような縄文柴犬としての、基本的な考え方が重要になると思います。この基本的な考え方を認定するには、それなりの知見が必要であり、場合によっては試験・資格制度も必要になるかもしれません。

こうした展望の実現のために、どうしても必要になるのは、各地で活発な「交流会」が開催されることだと思います。最初は少人数からはじめましょう。決して、形式にこだわらず、長期の見通しを持って縄文柴犬の特性を楽しく語り合う中で、様々な意見や提案が湧き出ると期待されると思うのです。

(2015.01.12)

(参考文献:23頁に続く)

縄文人の狩猟 - 1

金子浩昌 (東京国立博物館客員研究員)

はじめに

もう30年も前になりますが、私は日本列島各地の遺跡から出土する海、陸棲獣類の遺体について述べた書を江坂輝彌先生のおすすめで刊行しました。『貝塚の獣骨の知識-人と動物とのかかわり-』(1984年刊)で、ここでは遺跡から動物遺体がどのように出土するか、それを調べるための骨格形態の特徴について述べてみました。動物遺体の形態の図示ということの主眼としながら、人々がそれを様々に利用しようとした様相、生活との関わりをみるという視点を大切にしましたが、至らなかった点についてはその後の資料の報告の中で述べてきました。

江坂先生はこれよりも早くに講談社から刊行の『縄文土器と貝塚』(江坂輝彌編著『古代史発掘』1978年刊、共著者渡辺誠氏)を編集されましたが、その中に「漁撈の展開」、「狩猟の展開」の各章と「釣針と鈎の系譜」で写真版の編年図、さらに地域別に示した「縄文各期の釣針の折り込み挿図」を私に執筆、製作する機会を与えられました。江坂先生、渡辺誠氏執筆の各項とも、丁寧に豊富な図版が使われています。多彩な編集の内容は遺跡を自ら踏査され遺物を分析集成された研究の成果であって、今日に至っても類書を見ることはないでしょう。江坂先生のご厚情に深い感謝の気持ちを持っています。残念なことに本文を書き上げた直後、江坂輝彌先生の訃報に接しました。下北の調査にご一緒したとき、クマ、ニホンアシカが出土、それを報告したことが昨日のようです。

さらに鹿児島大学名誉教授西中川駿先生のお仕事にも触れなくてはなりません。私が遺跡出土のウシ、ウマ類の遺体を調べる中で種々御教示いただいていた西中川駿先生もまた専門の家畜研究から日本の在来家畜種の研究、さらに御自身で調査された日本列島各地の龐大な動物遺体について『遺跡から出土する動物たち』上下(西中川駿先生古稀記念論集刊行会)の大冊を刊行され、遺跡出土の動物遺体論を展開されています。

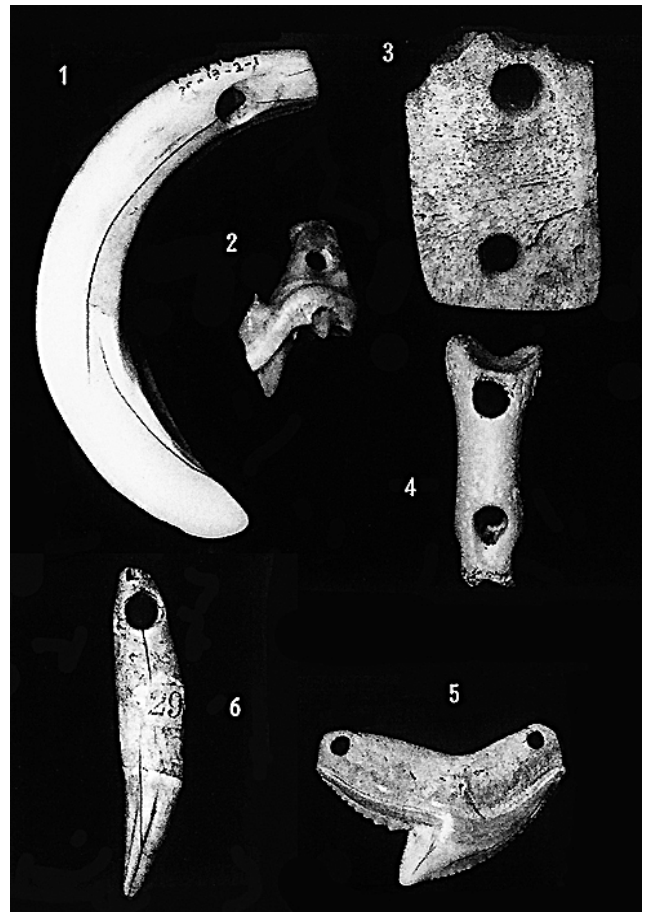
ここでは縄文時代に限って、捕獲の対象となった動物たちのこと、そして遺物を通してみることのできる社会的な問題にも触れてみたいと思います。

動物遺体を出土する遺跡

南北に長い日本列島は陸と海の豊かな自然に恵まれています。その自然に生きた縄文人たちの生活が1万年もの長きにわたってつづきました。平野部に深く入

り込み、海水の入り込んでいた谷—縄文海進期の谷—は次第に埋め立てられ海岸線は後退していきました。その間に貝塚遺跡が多く残され、動物遺体も残されて、人々と動物との関わりを知る遺物も遺されました。環境の変化は縄文人の生活の活動に変化をもたらし、自然に対応する力を培うことにもなったと思います。

動物遺体を出土する主要遺跡は貝塚ですが、洞窟遺跡、低湿地遺跡があります。それらが日本列島にどのようにみられるかをまとめてみたことがあります。貝種が少しでも認められれば貝塚としました。その場合、単純にある地域の貝塚遺跡の一覧分布表を示すのではなく、貝塚を構成する貝種の生態的な変化を基本として一覧をつくり、それに対応する魚、鳥、獣類を表示しました。貝塚動物種の変化も理解し易くなります。



各種の装身具(陸前高田市中沢浜貝塚-旧石器時代~縄文時代)
1:イノシシの下顎♀犬歯。2:オオカミの上顎♂。3:カメの甲羅。
4:ツキノワグマ基節骨(第3)。5:イタチサメの歯。6:オオヤマネコの上顎犬歯(全長43.5mm)。

*以下、本号の図は —

「いわて未来への遺産・遺跡は語る(岩手日報社2000年)」より

全国的な規模でまとめてみました。貝塚遺跡の分布地図もつくりました。

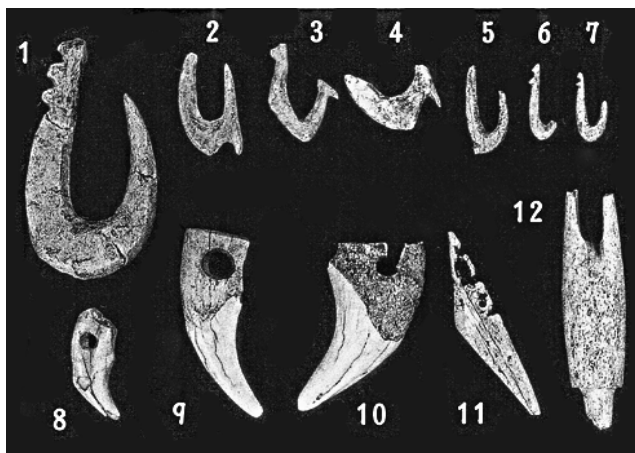
『日本の石器時代貝塚遺跡と動物遺体』（徳永重元博士献呈論集 2007年10月）

ここでは貝塚遺跡の分布についての問題が主になりましたので、貝種による遺跡の性格、分布について述べました。魚種については生態別に主要種をあげ、鳥、獣類については主要な種類を表にあげたので、参考になると思います。やはり、食料資源の内容というのが骨子と考えましたから。さらに釣り針、銚頭などの骨角製品の形態別の地域的な分布を地図上に示しました。素材は狩猟によって得た動物の骨角から得られたものであったからです。単なる釣り針、銚頭の分布地図ではありません。私が遺跡出土の動物について述べる際に食料となったいわゆる食物残渣の遺物のみではなく、その動物骨格で製作された骨角製品も重要と考えたからです。骨角製品は人と動物との関わりをさらに道具製作の面からみることが出来ます。縄文人は骨角を素材にした各種の生活用具の製作にすぐれた技能の持ち主でした。研究者もまた骨角製品の素材、製作の意図、形態の変化、製作技術の変遷の復元に注意しなくてはならないと思っています。

狩猟の概要

狩猟活動ではイノシシ（南西諸島のリュウキュウイノシシも含めて）、ニホンジカなどの大型獣を主とした猟が主体でした。次いでニホンザル、タヌキ、アナグマ、テン、カワウソなどの中、中小型獣を獲っていました。

鳥猟では、関東地方にまで飛来したハクチョウ、カ

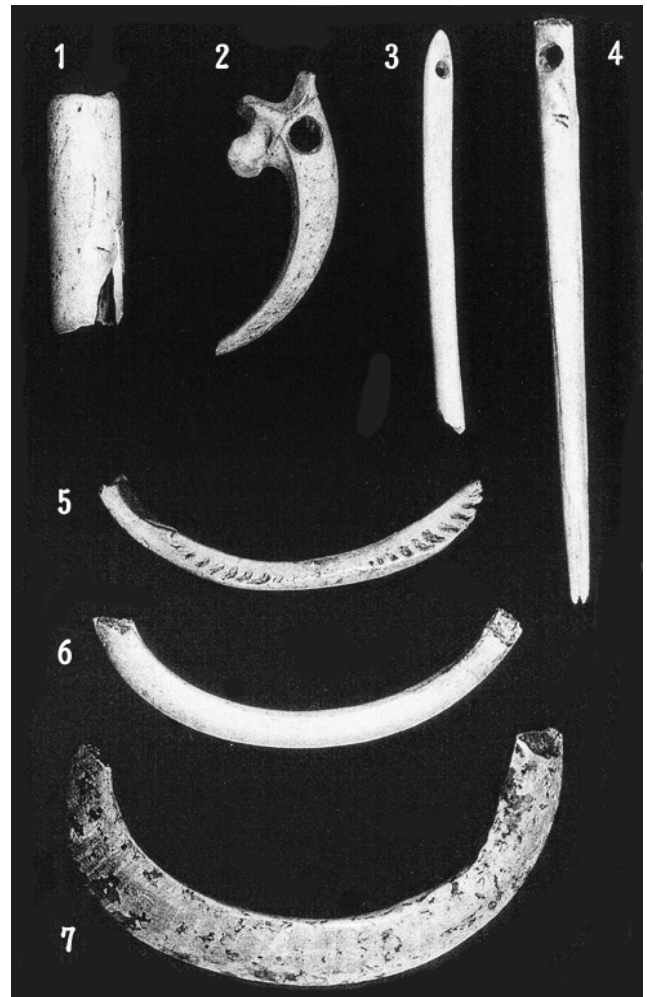


(岩手県久慈市・二子貝塚-縄文時代後期～晩期)

1～7:釣り針(7は1.3cm)。8:ツキノワグマ切歯。9:犬の上顎犬歯。10:ツキノワグマ下顎犬歯。11:銚の先。12:矢じりを柄に装着する道具。

(岩手県大船渡市・関谷洞窟-縄文時代早期～古代)

1:垂飾品。2:オオワシ末節骨。3～4:骨角針。5～7:貝輪。



モ類、キジ類が多く、ワシタカ類は稀にしか遺骸をみることができません。今でもガンカモ類の飛来する東北地方仙台平野奥の湖沼地帯ではヒシクイ、カモ類の飛来が多く、沿岸の貝塚からはどこよりも多くのヒシクイ、カモ類の遺骸を出土します。この辺りの貝塚は純淡水産の貝種です。

海辺ではアホウドリ類、ウの類を主とした鳥猟がありました。一方海にかこまれた日本列島の海岸地域ではアシカ、オットセイなどの鰭脚類、アシカ類は近海に多棲したニッポンアシカがいましたし、大小形のイルカ類が回遊接近し、それと自然に打ち上げられたクジラ類を見ることもあり、海棲獣類を捕獲、利用できる機会もありました。そのための銚猟を発達させたことは太平洋岸沿岸地域でも最も早かった場所の一つであったかもしれません。もちろん魚貝類などの水産資源も淡、鹹の両水域に豊富で、それを利用していたことは漁具類の発達から推測することができます。

—— 次号:骨角製品の数々 ——

私のオオカミ進化論 その2

生命の星・地球博物館名誉館員 中村一恵

前回、オオカミ類は3段階をへて進化したことを述べた。その際、コヨーテ類とオオカミ類の系統関係を明快に述べることはできなかった。けれども第1回を入稿してしばらくした後に、その点を解決することができた。具体的に述べると、前回示した表では、ムカシコヨーテ (*C.arnensis*)=?=ウルフコヨーテ (*C.etruscus*) と表記し、ムカシコヨーテに疑問符を付けて留め置いた。その後の調査で、ムカシコヨーテと北米のジョンストンコヨーテ (*C.lepophagus*)とは同一種か、もしくは互いに近縁な関係にある (Kurten & Anderson, 1980) ことを知った。これを *Lepophagus-arnensis complex* と呼ぶことにした。

まずは、アジアのコヨーテ類の系統を整理しておきたいが、結論を先に言っておくと難題であった。私としては北米→アジア→ヨーロッパ→アジアという展開を予測し、それらに該当する化石種を当たったのであったが、思う通りにはいかなかったのである。だが、ここであきらめるわけにはいかない。そこで、まずは顔を描いてみて、じっくりと考えてみることにした。

顔からコヨーテ類とオオカミ類の違いを観る

改めて顔のプロフィール (図1) を用いて、コヨーテ類とオオカミ類の系統関係を示すと、図1のようになる。冒頭で述べたように、北アメリカとヨーロッパに共通して分布する複合種として捉えてみてはどうか。旧北区と新北区の両方の種が同一種か、もしくは同一種でなくともごく近縁な種同士の関係にあるならば、生物地理学では「全北区に分布」と表現する。

全北区の分布の可能性の高いものが二組あり、図1の中で ⇔ で連結させて示した。1つは *Lepophagus-arnensis complex* であり、もう1つは *Priscolatrans-etruscus complex* である。このコンプレックスの前種からオオカミ類の進化を考える際、最重要種のウルフコヨーテの進化があった。コヨーテ類の *arnensis* が向上的に進化したものかもしれない。前者の複合種のうち *lepophagus* からは現生種で、北米に現存するコヨーテ (*C.latrans*) が進化した。これらが第1回で示し図2のコヨーテ段階である。

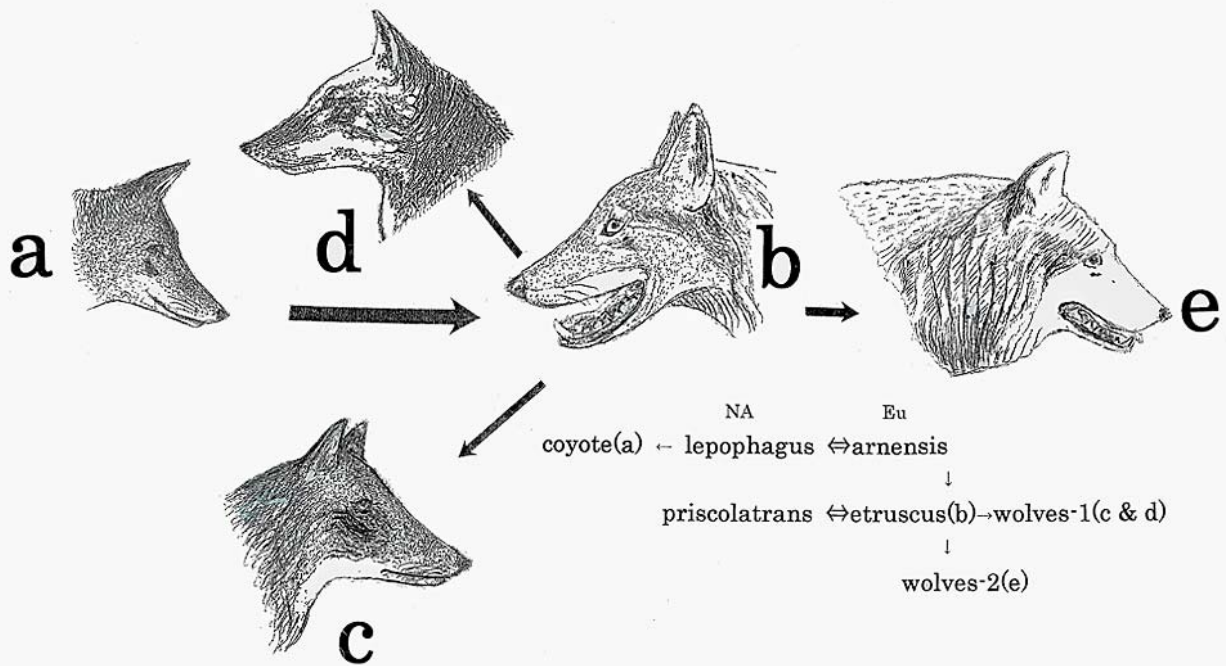


図1. 顔で観るオオカミ類の進化系統図

a: コヨーテ類、b: ウルフコヨーテ (*etruscus*)、c: ニホンオオカミ (*hodophilax*)、d: アカオオカミ (*rufus*)、e: ハイイロオオカミ (*lupus*)。NA: 北アメリカ、Eu: ヨーロッパ。矢印は進化の方向を示す。

次に、真生オオカミ類への発展につながったと同時に、*etruscus*はオオカミ-1 (*wolves-1*)とオオカミ-2 (*wolves-2*)の成立に深く関わった。コヨーテ//オオカミ段階であり、ニホンオオカミとアカオオカミの成立の基礎をなした(中村, 2014)。*etruscus*はオオカミ類進化を極点に導いた最重要種である(ハイイロオオカミ成立の項参照)。

*Priscolatrans-etruscus complex*の一方の端、*priscolatrans*の役割はアカオオカミの謎を解くうえで重要な種である。

図1-aでは、コヨーテ類というあいまいな表現としたが、気持ちのうえではムカシコヨーテをイメージして描いた。現生コヨーテの顔は吻が細長く、耳が大きく、オオカミと違って前方に傾斜する。いわゆる「コヨーテ顔」である。ニホンオオカミのタイプ標本(第1回、図1-3)の顔つきを観ると、どことなくコヨーテの面影があるかのように見えてくるのは、自らの「オオカミ進化論」の影響を受けたせいかもしれない。

図1-bは、主役のウルフコヨーテであり、Agusti & Anton(2002)の図を模写したものである。実物は見事な標本であるらしい。頭骨全長220mm。この数値がコヨーテやニホンオオカミのそれと比較して、どの程度の大きさなのか、簡単な検証をしてみよう。

コヨーテについては、幸いにもBekoff(1977)による詳細な頭骨全長のデータが公表されている。コヨーテは6亜種に分類されているが、頭骨全長が220mmを超える亜種は知られていない。ウルフコヨーテはコヨーテより大型であるが、アカオオカミ(*Canis rufus*)の頭骨全長の最小値に近い値である(Bekoff, 1977)。

では、丹沢産ニホンオオカミの頭骨全長と比較して見ると、その値は197.4~230.6mm(N=14, 2SDの範囲)である(中村, 1998)。むろん、ウルフコヨーテの測定値は唯1点であることに留意する必要があるが、ウルフコヨーテはコヨーテよりは明らかに大きく、ニホンオオカミとは同じくらいの頭骨全長をもつイヌ属であったと判断される。

以上によって描かれる、シナリオは次のようになるだろう。

Lesophagus-arnensis 起源の一派が新北区から、おそらくアジアへ移住し、アジアからさらにヨーロッパに移住し定着したのがムカシコヨーテであろうと考えられる。ムカシコヨーテからウルフコヨーテに発展した。ムカシコヨーテとウルフコヨーテはいずれもヨーロッパの更新世初期に出現している(Wang & Tedford,

2008)。アジアからムカシコヨーテのようなコヨーテ類の化石が発見されていれば、筆者の主張するアジア→ヨーロッパ→アジアの進化的展開(中村, 2014)が成立する可能性が高くなるのだが、アジアの資料に乏しく、まだその点に言及するレベルまで達していない。

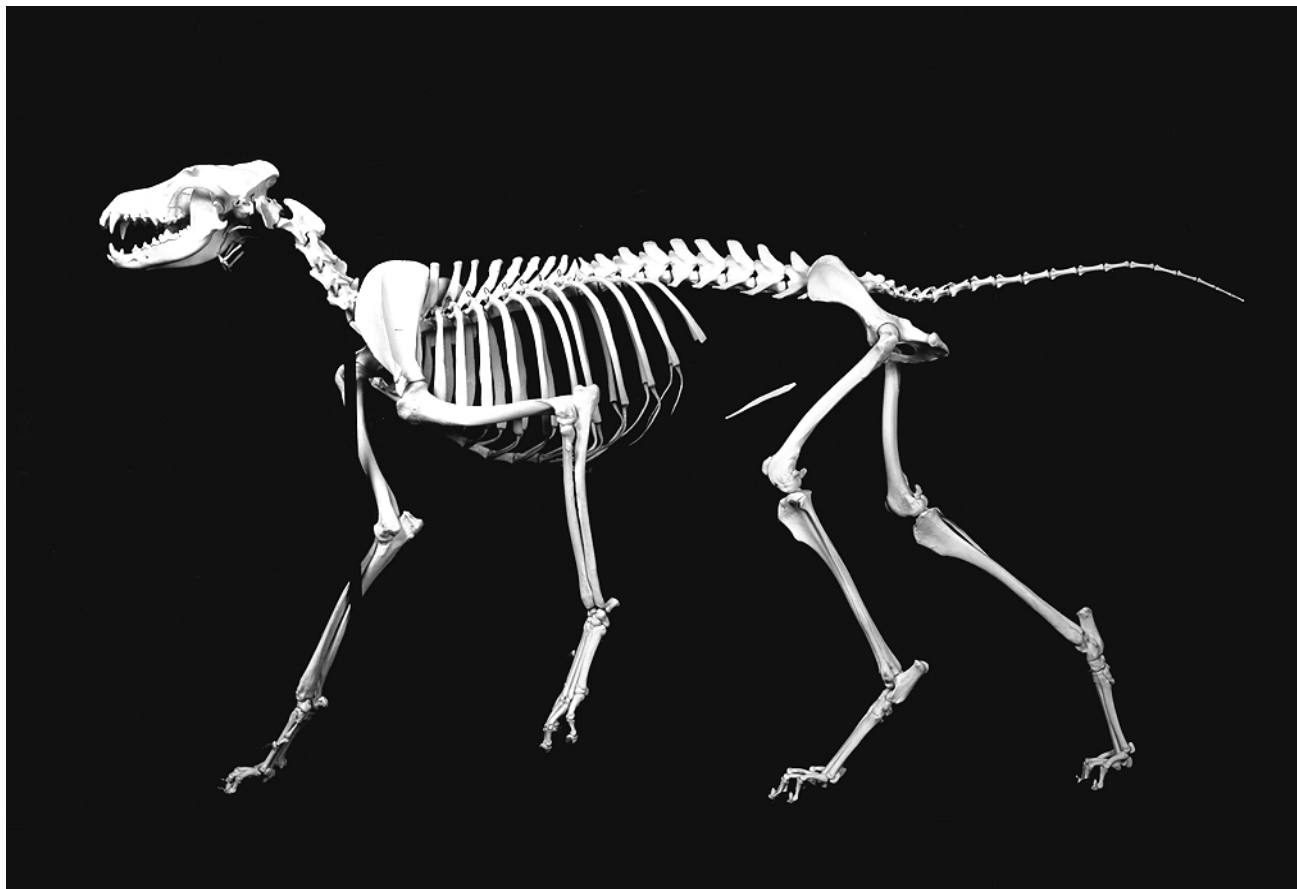
鮮新世後期~更新世前期のアジア産イヌ属化石に5種知られている(Wang & Tedford, 2008)が、私の手元にあるのは単にリストのみであり、手掛かりとはならない。分かりやすく、再度述べれば、アジア(ムカシコヨーテ *C. aff. arnensis*)→ヨーロッパ(ウルフコヨーテ *C. etruscus*)→アジア(ニホンオオカミ *C. hodophilax*)という展開のあったことを想定している。北米のジョンストンコヨーテ(*C. lesophagus*)は北米に留まり、コヨーテ(*C. latrans*)に進化した(Kurten & Anderson, 1980)ことは、*Lesophagus-arnensis complex*がコヨーテ類の進化の根幹をなすと考えたからである。

氷河時代とウルフコヨーテの種分化

氷期のような気候の変化により、動物相にも変化が現れることは古生態学の常識である。一般的に古い種は滅び、新しい種との交代が起こる。およそ1.8Maに氷河時代の新しい寒冷相が開始された。この時に起きたのが1.8Maの「ウルフ・イベント」であったことは第1回で述べたところである。だが、それからおよそ100万年後の更新世初期(0.9Ma)の気候は温暖であり、そのためヨーロッパの大部分に再び温帯林が広がり、多くの温帯要素の哺乳類が進出し、更新世初期のステップ要素の哺乳類との交代が起きた。1.2~0.9Maにヨーロッパのほとんどの地域が温帯林で覆われたことで、温帯要素のイノシシ(*Sus*, 現生種)やマカク属のサル(*Macaca*)等が出現した。

個体群の一部がステップ生活から森林生活へ転換させる、こう考えてみることで、ウルフコヨーテが2系統に分岐したことをより理解しやすくなるのではないだろうか。Kurten(1968)は、ウルフコヨーテは更新世初期期の森林が卓越した時代に棲息していたことから、極端なステップ地帯には棲息せず、むしろ森林地帯を好んで生活していただろうと示唆している。個体群の一部はヨーロッパ南部から東進して、東アジアの環日本海地域で種分化し、ニホンオオカミとアカオオカミへ進化した。一方、北方の寒冷ステップに残った個体群は北東進してベーリンジアに達し、モスバックオオカミの段階をへてハイイロオオカへと進化した。これが私の考えである。

図2. 北米産ハイイロオオカミの全身骨格. KPMN-NF0002174



縁的種分化により誕生したハイイロオオカミ

前節では学名が乱舞し、いささか混乱された読者もおられたかと思うが、これでも最小限に留めたつもりである。第1回の図2におけるアルファベットのLに気づかれた方は多いかと思う。ハイイロオオカミ *Canis lupus* の種小名 *lupus* の頭文字Lから取ったもので、ハイイロオオカミ (図2) の想定される発祥地点の意味である。

古典的な種分化プロセスの古典的概念は、広くゆきわたった種の存在範囲が、地理的障害によって2つに大きく分断される、というものであった。これはいわゆる亜鈴の図で示されるものであるが、異所的種分化というときにはほとんどの研究者が思い浮かべるのは、この考え方である。これに対して、マイアはまったく新しい理論を提唱し、従来の異所的種分化モデル、つまり二所的種分化説との混同を避けるために縁的 (= 周縁的) 種分化説と呼ぶことを提唱した (Mayr, 1954)。「創設者の原理」と呼ばれるMayr (1954) の考えは、以下のようにまとめられる。

1) 種の分布域の縁部で小集団が主要な集団から地理的に隔離されて遺伝子の交流が絶たれる。2) このような集団には遺伝的浮動が働きやすく、かつその地域特有の環境に応じた自然選択が効率的に働くので、主要集団との遺伝的性質の差異が急速に広がる。3) その結果、萌芽的な新しい種を生じ、ついには隔離の障害が取り除かれても、元の種と交雑しなくなって種分化が完了する。つまり、種分化の現場は主要集団から遺伝的に隔離された小集団 (= 創設者個体群) であり、その小集団内での遺伝的浮動が重要な働きをすると考えるのである。

ここで、マイアの縁的種分化説を援用するならば、第1回、図2のモスバックオオカミの分布域の縁部に遺伝的に隔離された小集団 (前回、図2のLで示した地点) がハイイロオオカミの誕生に貢献したであろう。

マイアの理論では、初期の小さな集団にある間に経験する遺伝的浮動とその後の自然選択により、元とは異なる遺伝的環境下で急速に、また多かれ少なかれ、

ふつうは形態的に大きな変化と生態的な変更がもたらされる。かくして、ハイロオオカミはモスバックオオカミを母体として北東シベリアないしはベーリンジアで誕生したと考えられる。

まとめ

Arnensis-etruscusの系列から1.0Maに分岐したHodophilax-rufus原個体群は前期更新世のヨーロッパに温帯林が卓越した時期(1.2~0.9Ma)に森林型と草原型の2タイプに分化したと考えられ、森林型は目前のギュンツ氷期(1.0~0.7Ma)をかわすために東アジアの環日本海地域へ移住し、ニホンオオカミとアカオオカミとに種分化した。更新世中期の70万年以降は寒暖の振幅は大きくなり、10万年周期で明瞭な氷期と間氷期が訪れるようになった。そして、氷期にはこれまでにない寒冷な気候となることがあった。そのため70万年以降の氷期に大陸と日本の間が陸化して動物が渡来できた時期は、少なくとも二回はあったと考えられている。それらは、およそ0.63Maと0.34Maである(高橋, 2008)。前回、ニホンオオカミの成立は1.0Maと考えられることは述べた。その推定年代から判断するな

らば、ニホンオオカミは中期更新世初期(0.6Ma)の渡来と考えるのが妥当であろう。すなわち日本本土へのオオカミ類の渡来は2波にわたって行われたと筆者は考えている。第1波は暖温帯系のニホンオオカミの系統、第2波は亜寒帯系のハイロオオカミの系統である。日本本土において大小2型のオオカミは共存した。

補記：日本から産出したドールの化石について

前回、ニホンオオカミとドールの関係についてごく簡単に触れたが、日本本土におけるドールについて補足しておきたい。我が国におけるドール(*Cuon* sp.)の記録は、福岡県恒見石灰採石場からの1例のみである(長谷川, 202)。日本列島へのドールの規模の大きい波及はなかったらしい。時代は更新世である。

訂正；前回掲載P. 7. 左下段「4万年前から1万年前まで北米を中心に棲息していた、」→「13万年前から1万年前まで、北米を中心に優勢なオオカミとして棲息していた。」

参考文献

- Agusti, J. & M. Anton, 2002. Mammoths, Sabertooths and Hominids, 65 Million Years Mammalian Evolution in Europe. Columbia University Press, New York.
- Bekoff, M. 1977. *Canis latrans*. Mammalian Species. (79):1-9. The American Society of Mammalogists.
- 長谷川善和, 2012. 日本の現生哺乳類を考える. 哺乳類科学, 52(2):233-247.
- Kurten, B., 1968. Pleistocene Mammals of Europe. Weidnfeld and Nicolson, London.
- Kurten, B. & E. Anderson, 1980. Pleistocene Mammals of North America. Columbia University Press, New York.
- Mayr, E., 1954. Change of genetic environment and evolution. In Huxley, J. C. & E. B. Ford (eds). pp. 157-180. Allen & Unwin, London.
- Mayr, E., 1965. Animal species and evolution. Harvard University Press, Massachusetts.
- 中村一恵, 1998. ニホンオオカミの分類に関する生物地理学的視点. 神奈川県立博物館(研究報告(自然科学)), (27):49-60.
- 中村一恵, 2014a. ニホンオオカミとアカオオカミの起源と種分化. 神奈川県立博物館(研究報告(自然科学)), (37):49-56.
- 高橋啓一, 2008. 化石は語る, ゾウ化石でたどる日本の動物相. 八坂書房.
- Wang, X & R. H. Tedford, 2008. Dogs, their relatives & evolutionary history. Columbia University Press., New York.

シバの散歩道 (25)

根 深 誠 (文筆家・釣り師・元登山家)

秋日和の午後、中原婆さんがタクシーでわが家へ乗りつけた。何の前ぶれもなく突然来るのだが、べつに私に用事があるわけでもないのに、私がいなければいなくても何の問題もないのだという。ときどきやって来て、杖をつき、タクシーからよろけるように降りてきて、ひとしきりシバと遊んで帰っていくのだ。シバが大喜びで歓迎し、おもちゃの垂鈴を口に銜えながらはしゃぐので、わざわざ見に来た甲斐があるというものだろう。しかし、タクシーを待たせてあるので、のんびり遊んでもいられない。

中原婆さんは八十四歳になる。どこも悪いところはない、ということだが、一目見ただけでギョッとするような巨体は、歩くのもままならないばかりか、タクシーの座席の出入口を塞ぐようになり降りやすい。何かの拍子に、例えば路上の石ころにつまずいたりなどして転倒したりはしないかと、歩いているのを見ているとはらはらす。

高齢者の独り暮らしは大変だと思う。

私もいずれそうなるのだろうかと思うと心細くもなるのだが、人それぞれで、八十歳をすぎても、好きな山歩きや釣りなどをして自然を愉しんでいる人もいるのである。しかし他方、ボケて寝たきりや、手足が不自由で歩行困難になったり、夜な夜な徘徊したりなどして迷惑沙汰に及んでいるものもある。

私の両親は二人とも病院のベッドで呻吟しながら死

んでいった。手術に同意したのがいけなかったのではないかと、いまでも一抹の後悔が残る。ではどうすればよかったのかと自問してみても、これといった妙案が浮かばない。なすすべもなく医者に言われるがままになるほかなかったのだ。

静かに独酌しているときなど、呻き声や看護師の不手際な対応が甦り、腹立たしくなる一方で自責の念に駆られたりする。心臓がドキドキし叫び出しそうになるのは、自分の中でいまだに整理がついていないからだ。それは肉親をあの手で送り出す側の態度、つまり看取る側として相応しくなかったのではないかと、もしかしたら過誤を犯したのではないかと思うからである。

※ ※ ※

心ない看護師がいた。バカモノと怒鳴りつけたいほどだった。

死期が迫り、何も抵抗できずに呻き苦しむしかない患者に「声を出すな、寝ろ」と強要するとは何か。「呻ればらくになるんだが」と、皮肉とも受けとれ兼ねない暴言を吐いたそうである。弱者につけ入って脅迫的な態度で接するのは職務上許されないことである。もちろん私としても、こうした体質が世に蔓延している現実を知らないわけではない。個人差や地域差もあ



タクシーでシバに会いに来る中原婆さん

るだろう。しかし、再三再四、この連載でも述べてきたことだが、「犬猫看板」や「ゴルフの打球」の問題をいっこうに解決しようとしてもしない体質と共通のものがあるように思う。

母はその看護師に恐怖心を抱いていた。看護師はいかめしい顔つきをした逞しい体つきの若い女性だった。体つきからして肉体労働に適しているのだろうと思った。母は麻酔が切れると苦痛の呻き声を立てているのだが、看護師が部屋に入ってくると必死で声をとめた。看護師が出ていったあとで、呻きながら「寝たふりしてらジャ」と私に話した。「呻り声を出すな」と叱られるからである。

ある深夜、0時10分から1時間ほどの間に二人、しかも先ほどとは異なる看護師が入ってくるなり、尿をしますか、とうむも言わず母の布団を剥ぎとったので、私はその粗暴さに仰天した。

「尿はさっきの看護師さんが採っていききましたよ」

私がそう言うと、

「あっ、来たんですか」と二人は顔を見合わせ、私に「寝てください」と言ってそそくさと部屋を出ていった。

何が寝てくださいだ、このクソドモがと内心、私は喚いた。看護師同士連絡を取り合っていないのだろうか。

母の身体を揉んだり摩ったりタンをとってやったり、水を浸したガーゼで唇を拭いてやったり水差しでうがいさせてやったり、寝やすいように手をあてがってやったり、タオルを取り替えて敷きいれたりしてやらなければならないのだ。それになにより母の悲痛な呻り声を聞きながら眠れるわけがない。耐え難い苦痛に、できることなら私が身代わりになりたいほどだった。

患者の眠りを妨害しておきながら、何をかいわんやである。せっかく躰をかいて寝ていたのに。6時間は効くと言っていた痛み止めの薬を飲んでいたので一時間もしないうちに起こされてしまったのだ。

「大丈夫だが、薬ッコ効いてらガ。眠ったガ」

「ちょっと眠ったみたい」

「枕ッコ取り替えるよ」

私は母に話しかけ、母の口元を見ながらそれに合わせて、思わず口を動かしている自分に気づいた。

夜中の11時から0時10分までの間に部屋を出たり入ったりしている看護師がいた。1回で済むはずなのに何をしているのかと不審に思い、

「どうかしたんですか」と咎めるように聞くと、

「いえ、ちょっと計っているんです」

看護師はそう答えたが、何を計っているのだろう。私から見ると、寝ている患者を起こしているとしか見えない。こいつらいったい何なんだと怒り心頭に発する。

看護師が部屋を出るとき捨て台詞のように言った。

「寝てください。起きてると疲れますよ。時間時間に見に来ていますから」

母が亡くなったのは2000年だから今年で15年になる。行き届かない看護状態を憤りながら観察し、私はメモを取っていたのだった。母が必死で生きようとする姿には鬼気迫るものがあった。その後、父が亡くなって9年になる。

※ ※ ※

冒頭で述べた巨体の中原婆さんは、冬の到来とともに音沙汰がなくなった。高齢者になるとままあること



シバと近所の子供たち-1



- 2

だが、季節の変わり目にポッキリ逝っちゃったりする例もあるので、もしかしたらと不安に駆られ、恐る恐る電話してみた。

呼び鈴が鳴ってもなかなか出ない。一週間に一度「デーサービス」に行くとい前話していたので、あるいはそこへ行ったのかもしれない、などとあれこれ逡巡していると電話に出た。

「オウィ〜ン、オワワワッ」息せき切っている。ヒザが悪くてすぐには立ち上がれないので、十回以上呼び鈴が鳴っても電話を切らないように、と電話に出られない事情を話した。体重がありすぎてヒザに負担がかかりすぎているのではないかと私が言うと、体重は75キロでたいしたことないという。しかし、若いころからアンコ型の体型で背丈がない。津軽の表現でいえば「短かブんと」しているのだ。何を食べても飲んでもおいしいのだという。それが「短かブんと」している原因だと自分で笑っていた。

中原婆さんの母は小柄でほっそりした上品な方だった。言葉づかいといい身のこなしといい、私の知るかぎり弘前では、シバの家である石場家の婆さんと双壁をなしていた。しかし、二人ともいまは鬼籍に入られた。私がずいぶん世話になった長男の石場家第十八代目当主石場屋清兵衛さんも亡くなった。わが家のシバはその形見でもある。

中原婆さんは七十歳まで「石中家」という小さな雑貨店、それが廃業してからはスナックを営んでいた。店名の「石中家」は郷土の作家石坂洋次郎の小説『石中先生行状記』に由来する。中原婆さんの父中原春雄さんは明治三十七年生まれだが、六十六歳で逝去、生前、石坂洋次郎と親交があった。『石中先生行状記』の石中先生の苗字は、石坂洋次郎と中原春雄の苗字の頭文字を合体させている。『石中先生行状記』に

登場する中村金一郎のモデルが中原春雄だ。同書から一部を引用する。

中村君は、元来石中先生の愚弟の同窓生で、本職は時計屋なのであるが、本職そっこのけで、拳闘(けんとう)や興行に関係し、人の儲(もう)け仕事やいざこざに、しょっちゅう忙しく飛びまわっている人物だった。一種の顔役に違いないが、陰気なところがなく、ノンビリして、いつも貧乏しているので、玄人(くろと)にも素人(しろと)にも信用があり、石中先生なども、疎開以来、なにかと世話になっている間柄だった。(「隠退蔵物資の巻」)

同書には中原婆さんが「マリ子」、母が「お孝さん」で登場する。

私は二十年ほど前に拙著『津軽点景』(マガジンハウス)で身辺雑記を出版したことがあるが、その中の「石中家」に中原婆さんの話を書いた。どういうわけか、拙著の中では比較的好評の本だった。

中原婆さんとの電話で、春になったら四合瓶を持って遊びに行くからと伝えた。中原婆さんが一合、私が残りの三合を飲むという寸法だ。事前に連絡をくれれば肴をこしらえておくそうである。

※ ※ ※

シバのところに遊びに来る最高齢者は中原婆さんだが、最年少者は一歳に満たない子供である。それ以前、シバがわが家に来たころ、散歩がてらにシバのところに遊びに来る近所の柴犬がいた。生後三ヶ月のシバにくらべて、その犬の名前は小梅というのだが、小梅は十五歳ほどの婆さんだった。シバは小梅と相性が合わないようで寄せつけなかった。

シバと近所

の子供たちー3



「このやろう、クソババ、オレのところに来るな」と、もの凄いい剣幕で怒鳴っているように吠え立てた。小梅は尻尾を巻いて怯えていた。「こらー、シバ、もっと親切にしろ」と叫んで、私は叱りつけた。しかし、いっこうに改まらないうちに小梅は来なくなった。家人が買い物に行く途中で小梅の飼主と出会ったとき小梅が亡くなったことを知らされた。

「小梅が見えないと思っていたら亡くなったんだ」家人は私にそう言って教えた。

小梅がいなくなって七、八年になるが、その家に孫が生まれて、去年から乳母車に乗って散歩がてらに立ち寄るようになった。まだ口を利けないのだが、どうやらシバと相性が合うようだ。散歩に出ると路上で、シバのところへ行くと、うわ言のように叫んで腕を振り指示を出すのだそうである。

よちよち歩きができるようになったころ雪が降りはじめ、孫を連れた婆さんの散歩姿も見られなくなった。家の中で遊んでいるのだろう。春になって再び姿を現すころには言葉が話せるようになっているはずである。どうやって遊ぶのだろうかと思像するのだが、シバとの出会いが愉しみである。

※ ※ ※

冬になると以前は、シバのところ遊びに来る人に代わって、キジやキジバトが姿を見せたものだが、ちかごろは来なくなった。住宅地の環境変化によるものだろう。リンゴ園や畑がつぶされ、老人ホームが建つようになった。

以前はキジの啼き声がずいぶん聞こえたが、いまは聞くこともなくなった。わが家の庭に飛来していたアカゲラやヒヨドリも珍しいものになった。相変わらず、



シバと近所の子供たちー4

モズに襲われて死んだスズメ



冬になると群がってくるのはスズメである。それまでは田んぼの稲に群がっているのだが、冬は雪に埋れてそれができないので、わが家の窓辺に設置された餌台に飛来する。朝夕、シバの餌の一部のご飯粒を餌台に載せておくのだ。

そのスズメを狙って来るのが一羽のモズで、ひと冬に一回は姿を現し襲撃する。

先日、スズメのただならぬ叫びに何事かと外へ飛び出してみた。雪面を引きずられる一羽のスズメの姿が映った。それを見た私は、スズメが怪我をして、仲間のスズメが助けようとして運んでいるのだと思った。私が出て行ったので、怪我をしたスズメを置き去りにして、運んでいたスズメが飛び去ったのだ。改めて見ると、置き去りにされたスズメは首筋から血を流し、絶命していた。かわいそうにと思い、雪に埋めて家に入った。

しばらくしてモズが現れたので私は驚き、事態の一部始終を理解した。スズメを引きずっていたのは、私にはスズメに見えたのだが、モズだったのだ。モズにしてみれば、せっかく捕らえたスズメを雪に埋められてしまい、気の毒である。そう思うにつけ、私はまた外へ出て行ってスズメを掘り起こした。

まもなく再びモズが現れ、瞬時にしてスズメをさらっていった。

冬になると耳障りなのは、毎度のことながら近隣の雪かき騒音である。雪のやんだ穏やかな日和には必ず、ヒマに身をもてあましたジジババがスコップを打ち鳴らし、路面に雪をばら撒いて執拗に砕いている。

その様子をこっそり見ていると、雪という自然の景物に対する憎悪が感じられてならない。そこで短歌メモを一首。

雪国の雪に馴染めぬその心

寒々として殺伐として